

地名の知

(群馬県)

桐生

「織都」発展住民パワー



街づくりの中心となった桐生天満宮。毎月第1土曜日には露店が集まり、織物などを販売する（群馬県桐生市天神町で）

【交通】JR桐生駅は、両毛線で高崎駅から約50分、小山駅から約60分。上毛電鉄西桐生駅は、中央前橋駅から約50分。東武桐生線・新桐生駅は、浅草駅から特急で約110分。桐生天満宮は、桐生駅から徒歩約15分。



「富岡製糸場と絹産業遺産群」の世界遺産登録をきっかけに、桐生市などは絹織物文化を発信しようと、富岡市の絹糸を使った織物土産の開発に取り組んでいる。

富岡の絹糸で織物土産開発

れる桐生織のあかすりタオルや、絹のふんどし、繭玉の形に仕立てた「サージュ」などを桐生市と周辺の17社が開発し、富岡製糸場でもイベントなどの際に販売している。手頃な商品の開発には、高級着物や帯などを生産する老舗も協力した。

求める文書が幕府に送られたという記録も残る。今年には「続日本紀」に、上野の国（現群馬県）が朝廷に織物を納めたという記述が残る。714年から数えて1300年の節目。桐生織物協同組合は「織都1300年」と題して記念式典や和装の展示会、1300人で1反の織物を仕上げるイベントなどを計画している。

「お上に頼らず、住民が直接動く」という意識は今も根付いている。それが歴史に培われたこの地域の財産なんです。桐生の気風について、桐生文化史談会の大里仁一会長(82)はそう語った。(前橋支局 宮下洋介)



NPO法人「本一・本二まちづくりの会」理事長の森寿作さん(73) 織物で栄えた街並みを生かして、1996年から江戸時代の青空市「買場紗綾市」を復活させました。桐生天満宮の南にある通称「買場通り」で毎月1回開催し、200回を超えた今では、東京からもデザイナーなどが集まります。行政に頼らず、

住民が自ら開いた市場という点では、昔の街づくりにつながるものがあります。2012年には本町1、2丁目と天神町の一部の計約13.4が国の重要伝統的建造物群保存地区(重伝建地区)に選定され、街並みを残すための補修工事も続けられています。織物文化を象徴する建物を残し、若い人が歩き回れるような街づくりを目指しています。

＊ 桐生の由来について、市史は二つの説を紹介している。鎌倉時代にこの地を拠点とした桐生氏の祖先伝説に「桐一本生す……これに因って桐生とかきて名字となす……」とあり、桐生氏が治めた地に桐が生えていたことから来たという説と、桐生氏の拠点は霧が発生しやすい山峡にあり、「霧生」が変化

由来

したという説だ。ほかに、市内を流れる桐生川が由来という説もある。桐生川の源流の合流点に、大きく曲流している場所という意味の「栗生(くりふ)」という地名があり、これが変化したという考え方だ。切り開いた土地につくことが多い「キリ」という呼び方に「桐」の字を当てたという説もある。

が桐生氏に取って代わった。江戸時代には幕府直轄領となり、領主の直接支配を受け、住民が中心となって街づくりを進め、自由な経済を発展させた。中でも、武蔵国から派遣された大野八右衛門が果た

した役割は大きい。郷土歴史家の奈良彰一さん(68)によると、八右衛門は1591年、住民がお金を出し合っで移転させた「桐生天満宮」を中心とした街づくりに着手。南北1・8キロ、幅5間(約9.5)の道路を整備し、両脇を間口7間、奥行き40間に区割りして、1606年までに「桐生新町」と呼ばれる現在の街の形を作り上げた。

この間、京都などから職人や技術者が集まり、織物の技術も発展。関ヶ原の戦い(1600年)では、家康の命を受け、東軍の旗となる2410疋(1疋は織物2反)の旗絹を一晚で納めたとされる。新技術の導入で織物の生産量は飛躍的に増加。江戸後期には、桐生の勢いを危惧した京都・西陣から、桐生の織物生産の差し止めを